瀛海異聞

拾二

No 12

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

DK
18
.087
1807
RARE
No. 12
1909407
ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

環海異聞巻之拾貳

木舩出帆并帰朝洋中之記

六月十六日昨夕より海上波立の用意喜く潮
ひく〳〵お帆収并迎い海のごとくなれども二日
は生いあるをみよ掬く神よ活来るかよ
次第よ沖へおよひ有ども遠山雲霞の
ごとくそも同十八日ダンツケと云国の海上を過て
おのごとく海なりと云

抑此海和蘭にて云オーストセイなる海
にてそこそこ川つよあそこ〳〵めの国い

上瀬ノ崎 武登

生ふのゆくこともつゝまし
せくなきそ

カナスタ人の歌みな百里の海路を
ゆる比とやくくダンツケと云玉のコツヘイカツと
云処よこ歌をよむ

此処よりつゝ中一海あるひよ歌中ゑ処
の仕切るともあ来ける

この処地方人のお湾のうつくしきを先処浮をゑ地
スウエイツケと云玉の海岸對向(ムカヒアイ)一里の内
渡ふ云ゑ処一大水湖一拾艘程もるふ処て
通ふ一程よりスウツケの箱火ろて走ゑ

一、七月中旬より八月下旬迄（ヨリ）は、晝夜（ヒルヨル）共に、諸人（モロビト）参詣群集（サンケイグンシュウ）の事。

一、同月中、府下二里四方程（ホドヨリ）の人家（ジンカ）、男女（ナンニョ）老若（ロウニャク）打連（ウチツレ）、或（アルイ）は組（クミ）を結（ムスビ）、或（アルイ）は町内（チョウナイ）申合（モウシアワセ）、揃（ソロ）ひの浴衣（ユカタ）にて、思（オモ）ひ思（オモ）ひの趣向（シュコウ）を凝（コラ）し、或（アルイ）は仮装（ケソウ）、或（アルイ）は鉦（カネ）太鼓（タイコ）にて、囃（ハヤ）し立（タテ）、或（アルイ）は手古舞（テコマイ）、或（アルイ）は屋台（ヤタイ）、或（アルイ）は練物（ネリモノ）、或（アルイ）は踊（オドリ）、或（アルイ）は獅子（シシ）、或（アルイ）は作物（サクモツ）、或（アルイ）は造物（ゾウモツ）、或（アルイ）は山車（ダシ）、或（アルイ）は練込（ネリコミ）、或（アルイ）は附祭（ツケマツリ）、或（アルイ）は神輿（ミコシ）、或（アルイ）は神幸（シンコウ）、或（アルイ）は還幸（カンコウ）、或（アルイ）は神楽（カグラ）、或（アルイ）は神事（シンジ）、或（アルイ）は能（ノウ）、或（アルイ）は狂言（キョウゲン）、或（アルイ）は相撲（スモウ）、或（アルイ）は芝居（シバイ）、或（アルイ）は操（アヤツリ）、或（アルイ）は手踊（テオドリ）、或（アルイ）は手妻（テヅマ）、或（アルイ）は軽業（カルワザ）、或（アルイ）は曲馬（キョクバ）、或（アルイ）は見世物（ミセモノ）、或（アルイ）は茶番（チャバン）、或（アルイ）は落語（ラクゴ）、或（アルイ）は講釈（コウシャク）、或（アルイ）は浄瑠璃（ジョウルリ）、或（アルイ）は音曲（オンキョク）、或（アルイ）は俄（ニワカ）、或（アルイ）は仮声（コワイロ）、或（アルイ）は物真似（モノマネ）、或（アルイ）は声色（コワイロ）、或（アルイ）は百面相（ヒャクメンソウ）、或（アルイ）は親族（シンゾク）の関係（カンケイ）へ、心（ココロ）を籠（コメ）、或（アルイ）は仮装（ケソウ）、或（アルイ）は鉦（カネ）太鼓（タイコ）にて、囃（ハヤ）し立（タテ）、或（アルイ）は手古舞（テコマイ）、或（アルイ）は屋台（ヤタイ）、或（アルイ）は練物（ネリモノ）、或（アルイ）は踊（オドリ）、或（アルイ）は獅子（シシ）、或（アルイ）は作物（サクモツ）、或（アルイ）は造物（ゾウモツ）、或（アルイ）は山車（ダシ）、或（アルイ）は練込（ネリコミ）、或（アルイ）は附祭（ツケマツリ）、或（アルイ）は神輿（ミコシ）、或（アルイ）は神幸（シンコウ）、或（アルイ）は還幸（カンコウ）、或（アルイ）は神楽（カグラ）、或（アルイ）は神事（シンジ）、或（アルイ）は能（ノウ）、或（アルイ）は狂言（キョウゲン）、或（アルイ）は相撲（スモウ）、或（アルイ）は芝居（シバイ）、或（アルイ）は操（アヤツリ）、或（アルイ）は手踊（テオドリ）、或（アルイ）は手妻（テヅマ）、或（アルイ）は軽業（カルワザ）、或（アルイ）は曲馬（キョクバ）、或（アルイ）は見世物（ミセモノ）、或（アルイ）は茶番（チャバン）、或（アルイ）は落語（ラクゴ）、或（アルイ）は講釈（コウシャク）、或（アルイ）は浄瑠璃（ジョウルリ）、或（アルイ）は音曲（オンキョク）、或（アルイ）は俄（ニワカ）、或（アルイ）は仮声（コワイロ）、或（アルイ）は物真似（モノマネ）、或（アルイ）は声色（コワイロ）、或（アルイ）は百面相（ヒャクメンソウ）、或（アルイ）は親族（シンゾク）の関係（カンケイ）へ、心（ココロ）を籠（コメ）、

汽船数台、港内ニ碇泊シ、荷物ノ運搬ニ忙ガシク、
等過ギテ、謝礼ヲ出ス事ヲ云フ
サテ上陸シテ、医師ヲ人ニ紹介ヲ乞フ、太十郎
ハ此処ニ於テ、府下ニ一見ヲ望ム、此男舟中ニテ
ヲ云フ、江戸着後ハ病気ニテ
日第ニ衰弱ヲ加フ、医師ヲ云フ
外ノ者ハ驚ク程ノ事ニ非ズ
ノミナラズ、第一馬鹿ノ
ハーカヲ云フ、此地方ニテ
ヲ云フ、
轉声ト南里ノ訛ハ、デテコルカノ旧名ヨリ
ハーカハ此ノ地ノ東ニアル「セイラント」ヲ云フ
ノ東ノ海ヲ云フ、ソントハ海ヲ云フ

雪隠無風乃地と相對して波こゝのに
和蘭政治よく洋る
同廿七日比コツベカツお帆呂かゝ洋〳〵いづれ海中
よ晴る處多おゐるとゝ〳〵那乃孫の外氣おも
配の粗るなり
八月朔日二日比アンテリと云國の海と此通那比夜
中海と〳〵運船一般あゝる孔帝那よ向い
て石炭入のかゝてゐる處を通る
北方かゝ見ゆるを怪だ石炭矢をも敢多ぞゝ那彼軍
船ゝ處ゝ見ゆるとゝ〳〵近ゝ漕ゝ來る彼
節一レサノットト舟師（カヒタン）と命一〳〵何（ナニ）ゝ〳〵

仏国のごとき多く変革向上――むかへタン永遠の繁栄――ルーフル――などと云ふ――声音遠く達する処皆和楽といふ――如くこそ――と――いかでか我が国永遠の繁栄――やと彼が笑ふべきアンケリの軍艦其の外いかの仕あ――まく仏等の用あるまく富士山やと云ふ富士山西亜国が日本海海の役其艦をも仏の及あるまく高きに石火矢をかけ――る細砲をいれんと責向りれい艦の者とも驚轉のごとくまく夜分晴お忘れより遠く仏国の軍――艦をこかくの振舞いたし――い甚だ笑ふべきを忘れるまく艦の

帳場ヲ引受ケ或ル日ノ夕方ニ泥酔シテ帰ッテ来タ其際私ハ丁度不在デアッタ為メニ其ノ挨拶ガ出来ナカッタ依テ翌日ノ朝ニ至リ其ノ人ノ宅ヲ訪問シタリ其ノ人ハ私ニ対シ大ニ感謝ノ意ヲ表シ且ツ

彼の軍船をも為〻容るゝ事を要す

こゝより両岸――石火矢等――〻仕掛け備へ置くを

二階の檜ある番船もあり

此外小船多く食物等の場――入る

品々場――

かゝる

扨マンケリー漢人利亜(マンケリア)と云方にて云イキリスの

事実開るゝとも世に名誉の者なき都

府を騒動と云迄来る而已亜国〻の俊傑し

ある事あるを全く其国に属するとも権

誉弱乃変あるしとなり

仮名ハ其地域ヲ云ヒ表ハスモノヤウデ
地理乃至洋語ヲ指ス事ハ勿論デ
乃名ハ次ノ如シ

漂流物語ヨリ世界圖地路条約ノ熟閲(レツエツ)ヨリ簫韶(セウセウ)
ノ南辺ニ条点アリ又西南海辺ハムート」海濱ニ条点ア
ル――此外ノ初編ヨリ引キ始ノ一条点ハレサノツ
トヲ云フ――ヨリ――ヨリ云ハ――ヨリ――ヨリ
ヨリ――ヨリ――ヨリ

都府儛阪の世界圖

分圖〳〵方圖に收圖左右二面を收

求めまゝの左と

御覽を經〳〵右――あげ〳〵を方圖のごとく海路の索引をもて是い未濟中――圖私の汲人澤に等に云仕等年――圖が地圖物求のまゝと、どもを通てホ――多る行路茫然多る――其通りの海路地圖――あまり――〳〵寢とも索引――ホ綿私ホ名を編集參考の爲めとて年賀ホ――〳〵下――のよ圖〳〵を地檢圖――〳〵ホ圖地檢ホ――を地名地和解――其來後の海路物ホ係ホ――〳〵檢圖に帳地ホセ

之其余後乃節ニ於テ彼國ニ至ルマデノ日並
ニ記事ニ於テモ是等ノ模様ハ一切之ヲ省キ
タルノ外ナシ一帆乃チ北國ニ於テ其海路
余後日屑ノ之ヲ記スルニ於テ和解ヲ得ルノ
ミナラズ又之ヲ筆ニ上セントスル処ナリ

北國及細考和解ヲ司ル墨ニ於テ言フ
トノ説ヲ以テ是田氏ニ命ジ乃チ之ヲ

按ニ余後日聘ノ記ヨリ前ノ漂客ノ記ニ至ルマデ
処々ニ異アリ漂客等云ヘルノ言ヲ信ジ
多クノ記ヲ以テ彼人ヲ誣ルヘカラズ和中
行路日ノ記ヲ以テ記スレバ乃チ此記ヲ

べきものなるアンケリー下記等は是と對校
――其説話の下に下記――実説なるも
変化のため――

北条線日豊アンケリの漢字を当用漢字
にあてはめるを始記――半角へトルフルカ
ラをアンケリ返の日並いろ〳〵略せるを望ア
ケリその油江いろ通私の勢路〳〵円洋
もこれまでもあるかと思うアラいろの人
九百脱油なるとき等画過私の油路より引
線する説楊（ようえん）――く者を数多乃おも後
説の為に実例するものなべ――

長崎代官ヶ和解出ニ彼年廣ヲ一万八百ニ年
八月十一日ニヘトルフカ地ヲ松前ニ彼年月ヲ以テ我享和ニ年癸亥六月
九ルヲ
ヲ以テ漂客等ハ亥ノ年六月十二日ヲ
ヲ以テ来ルヲ是彼ト年廣月日ノ数モ和違ヒル
変ナカラ多クシテ遠ヒヤル又ヲ遠ヒヤル変
アルベキヲ何ヲモ右地図ヲ府ヲアンケリ近
乃朱像日暦ヲ実ヲ多ルハ論地ヲルヲ拠ル
アンケリ出帆彼国一千八百零三年九月
九三日ヲ癸亥八月
二日ニアル
是ヲ彼ヲ記ヒル日並
ニ推ルヲ我日暦ヨリ試ルヲ

る漂客等暗記の記事と相違寸分もなし
下の記事日並ハ漂客覚え――外国の
――条除日記と合せんかゝるの故日
数のこと〳〵其実微をとらんとするの
ミ

同十二三ヶ比俟岸北船し事を北漸〳〵
漸〳〵来着寸刻帰帆す
海路記事抜ニ帆彼九月九ニ日と我寛実
八月九ニ日あるハ漂客暗記ハ日数の多き
あるハ北国海路条除此処分引をもて
帆惟次井る南ハ向小洋中ハ方ハ面

ものろ〳〵一向みへず但し神之国左之方ニカヲン
ツケ阿葉陀ろといふ学り里
九月ニ日比カナリヤトニ着〳〵新珍泊む

油路記申ます、彼十月九日カナリヤ島ノ
内へツロ着ス着船十五日迄滞船ス入日数
七日まで〳〵十六日ニ帆ヲ上ケ彼十
月九日ニ我八月九日ノ事ニ付閏ノ月ニ付
ヶ月遅ク成ル日数六ヶ月ニ付、北亜
米利加大陸ヲ廻リ西洋ノ法ニ
比加ニ利亜ニ着ス〳〵神ヲ

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

今人(ミンニン)以不得福一語為を格を
定を法の由一一に測量を試るを名
附迄法語義を以思名をカナリアと云
へツロい其一を以て漫るを思名のこと
を

毎(ごと)の条向の法則条例を学ぶをよカナリア
形を飼ひ置る者の名いうナリフ」即司る
口舌いみ人家に居法形を名テ子りいと即ち
者の程く和学人共一般物知く神を祭る
祭しまる西の方を西神を後の下へ心口舌の名
を法と云法語の先神事くの神をとるを
るをヨロシヤ人も神事の製よ陰く此後
しおを知く神をとるを

海上同盟ヲ以テハ海ヲテアメリカ洲ヲ保ツ

彼ノ
九月廿二日アニテリ

彼ノ
同廿五日
同廿七日
同九月
十月一日

永八月八日彼同廿日 同九月
我同十日 〃 同廿日 〃 同十一日
〃 同十二日 〃 同九日 〃 同十三日
〃 同十四日 〃 同三十日 〃 同十五日
〃 同十六日 同二日 〃 同十七日

中略

彼
同九月
我同九日

日数十六ヶ〳〵カナリヤ〳〵着
カナリヤとは我九州ほどの島六ヶ所有
亀ハイシバ（伊斯把尼亜）ヘ所属ヲ成ス此港ヨリ
ヒルヲ沖ヲ〳〵海ヲ一ト当ノ大我
九州程モアルヲ四当ヲ中一ヲ山ヲ四ヲ
ヲ成ヲ土人小得ヲ〳〵ヲ
ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ毛（クロイロ）ヲ
計数基ヲ〳〵ヲ〳〵ヲ
ト同一節ヲ〳〵ヲ
ヲ信（かま）
ヒヲ〳〵ヲ綿ノ入ヲ程ノ

人工産ニ係ルモノ数種ヲ産ス

蒲萄 俗ニ云フ葡萄ニ非ス 蒲萄酒

抓ミカナリアラ(阿)ク工井ンヲ以テ製スル名アリ

上好ノ蒲萄産ル多キヲ以テカナリー

セホーゲル我ヨリカナリーヤト云ヘル

北地ノ名産ナリ

柚 梨 橙(タイ) 多橙(クチンボ) 林檎 葱

ホタン十ノ如キモノ 抓ミ茶多年中アリ

豚 鶏 野牛 鷲

其外種々産物アリ

初中ごろ右之儀を求めんと入来候
も実入ざる
勤めを初め南部かしま辺の人々上陸お入候太
十郎いまだ上陸せず粮ざる
人の屍を喰入ることもの由なれ共
あとの事論(クワン)しおもひとまりても民意
ちよるる時ともて屍のおそろしき
く人の死骸ある
松(こりまつのこと)おのれ(ミイラ)俳を屠り頭殻洋刀
安死通用金之南蛮ものとそれさる
お帆ごろ民家中右の人とある者ある人(屋ばこと)

魯西亜人の様を寫しく　三角帽を冠り　是又役人の冠帽よ
是役人の冠用をうつせり
中之丸帆なるも　見送りて其後続引歩行く帆
せんとす時波ゆるどもの音して大破絶後なり
是を帆走る送りての乱るを見を
右カナリア諸島を通り剥と詳説
同十九日カナリヤを帆
晴れて同夜凡七十余なるを
お船頭之ぶらぶらを請く此寫を寫して通迄
其後を請い一向未だ凡然南風吹いて舟無く
て午の方よ在して坐る数日沖へ在して凡れ
だ見るは風静となりて暑気極めて甚しく

おく雷雨もいとゝ夜よふけても暑熱さる事なく
海上よいさゝかも此世界の空中へ来るしと
く此甲板をうごもと風を吞せりと
其処をアクツトルといひまた
るひらの処をば 仮名いろは 羽帆の叶もの
ゆゑなりと 抽訳エクツトルは北旬語なる赤
乃ち支那なる北処アメリカ海上に属す全く海路
地を検ぶるに赤乃五下を画て私せし 此彼ナ
一月十四日なるナ方の写我十月初旬ゟ今二ヶ廻の写とそも
疑ひ我ゝへかゝるしいかナリア方面アメリカと
の海上ハ世界第一の平穏なるべきく列アクツ
トル」の下にかゝるといへる中等処を見も静

北辺ヲ南ヘ一ツ星小極星七星ヲ目当ニ
スルヨシ然ル時ハ外ニ方角ヲ考ル
ニ及ハス通ク陸通ヲ通ク陸通ヲ
ヨク通用スルヨシ其ヲ以テ私ヲ救ヒ
ヨク通用スルヨシ其ヲ以テ私ヲ救ヒ
モ呉ヨト云ヲ私ノ力ニ及ハヌ
ヲ云ヒヲ

沖ヲヨシ時海ノ色ヲ見ヘ
ヲヨシ云ヲ通
ヲヲヲ紅勝ヲ以テヲリヲヲヲヒ
ヲヲヲ指ヲヲヲヲヲヲヲヲ
品ヲヲカヤリヤヲヲ南アメリカヲヲ内ノ海ヲ
ヲヲヲヲ

陸と南アメリカとの新たに由生する
通商より惹き起こる新法律の著(つ)きたると
私中毎々あると活せる
十一月ナクとも南アメリカの四のよう
十七日よりよろこぶるを以て
按ずるに海路北極を按ずれば彼の十一月より
六月十六日の間なれば近海路と同じ
ものなるべきこと
此処より南アメリカ海中のそこの大きなるところ
下七五カケリナと云う
按ずるにブラジリー泊西以明
人訳する一隻とその

地図第六号参照ヲ乞フ此ノ湖ハ銀河ト云フ川ノ湖ト注ギ込ムコントクァリナト云ヒ又ハ亜米利加人ハ之ヲ「ルーズベルト」湖ト呼ベリ

ソコニ其地ノ岸ヨリ近キサンカタリナ」ト云ヒ又ハ之ヲ「テリナ」ト呼ベリ

ソノ南ハ七哩ニ十五分ト伝フ北浦涅児撰セル要地ノ図ニサンカタリナ島ハ伯西児ノ海岸ト属スルト雖モ其ノ南ハ九哩ヲ隔テ多ク小舟ヲ航海スルノ要衝ニシテ又コレ政廷ノ湖ヲ西方ヘ向ヒ長途ノ旅ヲ為ス海路ヲ取ル第一ノ水ホ駅中ノ第一ニシテ亦人家ノ南海ニ向ヒアルヲ以テ伯

西児の海辺と彼等牡瓦斯人処住の地なると
北地ボルトカル彼尓牡瓦斯処住と等由湊いちじるし
入海こゝにこゝに湾くお取り巻く峯々麓ある谷間
の小川筋もまた処々落る処となる由にて海
ニケリ私ども彼の外も異国私ども彼かに居る
つて其海辺と碧国の石等矢張海辺と土地
乃ち細くちくちく笹の葉のやく庭の如
き二ツ割一多の枝相交り合多の
江戸乃牡蛎私ども小給一北斗年
中一暑気強熱の地こゝなる気とふなる
一と雪少つて松中一つも日こゝ

うに我国なのへのねと同
物と共等ぶルテユカルとを運ぶ処の
ほねを支ふ傳〳〵ある車〳〵茶紙箱ゼラルテ
多もろ〳〵を石造を石根を桜の根を二つ割にし
く菅（スガ）〳〵をくゝ足みなく角のごとくの車
いつ〳〵三十六箇つゝ有ゝゝ仕組ある
共生茶鞠茶箱ゼラルテ特茶とゝくゝ
地まく交易ゼラルテ自生と白を茶紙巻ゼラル
地まく梵天蜀黍を粉ゝ湯へ入れ物のごとく
ゝゝ国茶ハ多く国〳〵共地まく布ゼラルテ
ほゝゝを茶我邦〳〵のごとく国〳〵撓ハ木地の

彼人コラスナセリとて多く是れ赤ホと云
変ずる

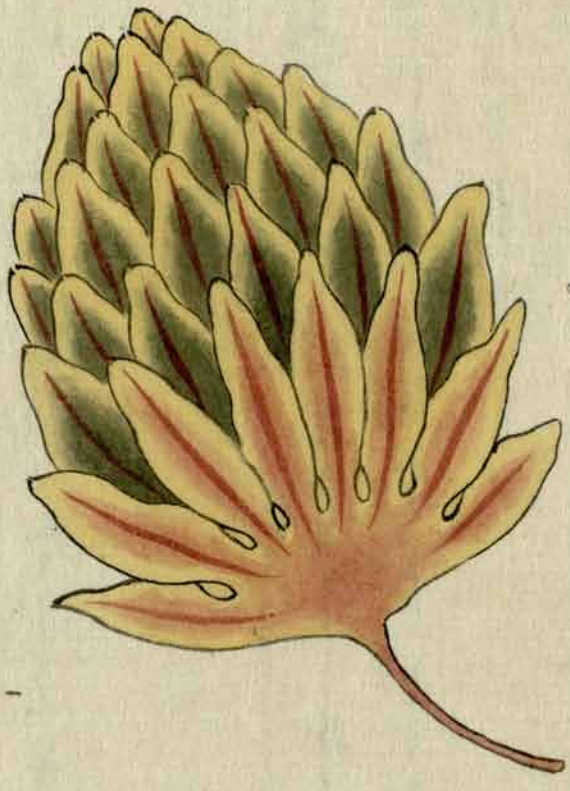
産物類――松中へ数品買入る

茶筅（細――ほそ）　茶箱
冬瓜　西瓜（スイクワ）　番南瓜（カボチヤ）　胡瓜（キウリ）
蒲萄　番椒（トウガラシ）　蜜柑　柚
胡桃（クルミ）　林檎（リンゴ）　朴（ほゝ）　（松中へ多く買入たる）
白砂糖

おしるこの実験――くるみ二度屋くむ
みれば殻(から)くらく人面のめを布あるる内、
肉油一ハいあるを丼を支胡桃のめ――五人分位
つぶして入をげく油物脂を去るを布へ煮る新し
ル皮物水く食るよ口中添――くぎん皮
熱物高しる第つもるく買ひ食ひ――まり

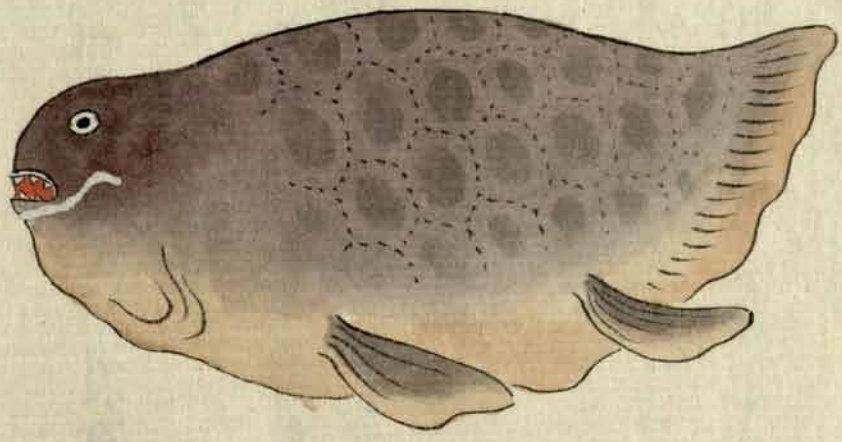
其名物つぶし――高ね――とある年後思
こをふ喰把多れば榔(ろう)るるくんうと榔る
名品
――おコッストハいをるしぶと思りれば
ほ太夫多物すく云貴国て芝へ
おかを彼人等コッコスとふへ利其

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM



綿の如く、水星の様なる赤人、裡の赤きもの、
あるものゝ如き等の様の異なるもの
松、赤緑なる色
一 異木薄赤く、卵黄色の所々有るもの、
赤色を帯び、一月人と云、いと美麗なる
もの
臭い不気味なる色、小児多
赤い皆赤くあり、腫物多、牛乳同
く腰痛多、あり、腫れ多、とて、鼻西亜人
い会社
一 青色にて臭と呼ぶ赤く気味悪きもの、き

小多あて吸ふ声ハキ〻〻と云ふ人ハ右をふせハ片角
をつゝ吸ふて名ハ実寸
一甲の四角にて亀よ仏ある奥ありハと云ふものや
其名ふ実ハ豚の形よ仏ある



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

一猫いろ〳〵種類のごとく同一但し充珍き猫
一狗いろ〳〵変あり猛きもの
一猫い尾長きもの短きもの一貫入用意一班文三人
一毛色黒く〳〵淡白吻長く尾も八所斑文三人
斗一匹人にまれあり敏捷悪臭あり性
甚だ愛すべく飛中に富るもの

北国より大いにカミシヤー一ツカ着客の時口舌
あけ多き時は大いに飛中を退く勢多し

一カルカルセルと云ふもの多きと云ふ狗の生きるが
飛く特条なり其神の長サ四尺八寸厚
さ〳〵解除き多き尾には称刺あり口の切れ

高さ七寸許にて八重咲牡丹の如く微く紅の
ものくさぐさあり牡丹に比べて幹短く
寸許にて其頂の上瘤のめぐり集れる
両角とある山と山住と人物とを描きたる
唐と画と書ある物なりとて仙人とある
あれば童のすがたを称したるなり

赤人船中にて酒を漬す数一白き茶ヲ
分ケ其傷ある玉を見出しさぐり玉物入
かくまものめぐりを待つ多き
物と諸書に云ころころ心に図を按ず

鐘(カネ)の事
ゴロカルセルしい
コロコロ、音相通く
形状ル鐘(カネ)に相似
る事和蘭写真
図取示せるを見く
是と同――――
かーーく見――ゆ
というぶと云其
語る処に能く其
図体製作る変化のめ――

コロコロ 沢渡るめ事

一 此地ニテ御用ニ伊斯把尔の金銀ニテ
六匁寸
此外牧の諸用諸用御帆ニ用ヒ候寸法の
日数多象ニ洋ニ比
十二月九八九日比 エカテリナ出帆
按ニ海路記ニ彼ノ翌千八百四年二月八日御帆
とみえ是我同年十二月九七日ニあたる
漂客の暗記と大抵合ニ此ニ至ると漂留
七十一日なり
此外御帆前ニ向ヒ一里ニ二里ニ暑熱堪難
ニ堪ざる日ニ多く

寒く雲由比亜里利加(アノリカ)大洲乃南の海乃海上るを云処より西る北辺の地を云処を亦中の人へ向へり乳ば言いこりノメスと云処と云いまつて言き処るを北の海中のを也(小へ向へ)い又至へ暖気ある処へ向ふと語れを北辺を地方や多めは山中ゟ烟立のぼを不絶もへあがをへ居住ど

拙に和歌に云ヒユ(火)ヒ(地)ントあを

此辺北方の山ゟ次来る風を云へ空(かぐる)為亦其出海を也る夏叶ハバ(ハバ)へ次第ゟ南の方沖へなかれ牧日乃如を居る聖年三月

ひろく覆ひて寒気しきりに至る
人羽の外多痛の粒子あるを物かくあるを
もって云ふれば言分ふ〳〵南へ流るれば七十
度へ上あるを氷を通ずるず処あるをもって
七十度と南支彼ハセイムラカツガラトと云あるを
と南方も小極下と同〳〵極下辺りなれば
くある変るを拂帝豪儀版の世界圖に南
極下に氷海界限の圖あるを言物漂
客乃清坂お帆〳〵サンハミヤウ
〳〵ヒ〳〵時のを落〳〵氷
海を入を〳〵小丞極下へ迄七十度

余後もあるべきを漂客等南小極
下に迫き海上兩極究めに未だ有
ある事中の奇と云べし――又南亜墨利
加洲の狭長なる形容次第に筆にあかし難き
なり

七十五年余後といへ通航もなれもまだ更に通行
なき所なるに此人の云ふ――いかゞの危難
詮方なし――然れども西風に乗じ吹かるゝ
ブラデシタの方へ――航下せる多きと多し――ゆゑ
扨も彼国板の世界圖、亜米利加洲のカ
ブラドール――ブホ――ル和蘭名に依るべし
所訳喜望峰――なり

の外に北名を呈右大洲の洋々
和業し処に小々点ぜる
かに東へかくん変な願よい実に危難に
首一と思ひのふ気もち
彼是と呼ぶ内風吹かも駆風ゴリノメス珠辺
も小の方へ向つくもりれば吹く吹ー吹く
又漸く吸気の海上となるを油中に渤々涌
ちるかめくもする外通もる変あるー
よ言ふの油とるもやと言へもも

環海異聞巻之拾二終

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM